



© Yuji Hori
伸行さんはプロのピアニストとして国際的な演奏活動に挑んでいる

「巻頭インタビュー」

子どもの才能を引き出す子育て

辻井いつ子

Itsuko Tsujii

ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝したピアニスト辻井伸行さん。世界の観客を魅了する伸行さんの演奏は、母・いつ子さんの二人三脚で築き上げられたものだ。伸行さんを、世界のピアニストとして育て上げたいつ子さんに話を聞いた。

写真：矢幡英文
取材：文：船木麻里



つじいつこ

1960年生まれ。短期大学卒業後フリーのアナウンサーとして活躍。86年に結婚。88年に生まれた長男・伸行氏が生後まもなく全盲と分かり、絶望と不安のなか手探りで子育てをスタートする。2009年、第13回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで伸行氏は見事日本人初の優勝を果たした。著書に『今日の風、なに色?』『のぶカンタービレ』『親ばかカ〜子どもの才能を引き出す10の法則〜』（いずれもアスコム刊）。

息子のはじめてのうれし泣きに自らも涙を流す

「ノブユキ ツジイ」

表彰式の最後の最後で、クライバーン氏から優勝者がコールされた瞬間、会場は大歓声で湧き上がった。自分の名前が呼ばれたことに気づき、あわててステージに登る息子・伸行さんを、辻井いつ子さんは、まるで映画のワンシーンをみるかのように眺めていた。

アメリカ・テキサス州フォートワースで4年おきに開催され

る「ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクール」は、ピアノの国際コンクールとしては、ワルシャワのシヨパン・コンクールと双壁をなす、世界的な国際コンクールとして知られている。

2009年6月に行われた、13回目のコンクールで、伸行さんが日本人初の優勝という栄誉に輝いた。

それまで他のコンクールで賞をとったときには満面の笑みで喜びを表現した伸行さんだったが、この時は違った。大きな優勝カップを手渡された時、思わず

ウツと表情が崩れたのだ。はじめに見る我が子のうれし泣き。気がつくと、人前で泣くことはめったにないといういつ子さんもまた、大粒の涙が止まらなかった。

絶望の日々を救った1冊の本との出会い

伸行さんが生まれてすぐに、視覚障がいがあることが分かったのです。

辻井 ええ、出産の喜びもつかの間、伸行が全盲であることが分かり、谷底に突き落とされたようなショックでした。その障がいの重さに必死に耐えながら、悶々とする毎日。育児書には、赤ちゃんと目を合わせて微笑みかけてと書いてあるけど、伸行は一生目を開けることがないんだと思うといたたまれなくて――。

当時の日記は、こんな障がいを抱えて、それでも伸行は生きていて幸せなのか。もう、毎日が辛い。何をしても辛い。そんな言葉でいっぱいでした。

絶望を感じる日々の中

で、どうやって子育てを前向きにとらえられるようになったのですか？

辻井 どうしたらいいのか分からず、わらをもすがる気持ちで障がいに関する本を片っ端から読みました。でも当時は、どうやって障がいというハンディを克服して社会という枠にはめ込むか、という視点で書かれたものが多かったです。そんなとき、福澤美和さんの『フロックスはわたしの目』という本に出会い、私の気持ちのスイッチが切り替わったのです。

どのような出会いだったのでしょうか？

辻井 視覚障がいを持っている福澤さんが盲導犬のフロックスと一緒に歌舞伎や展覧会、旅行に出かけるなど、毎日を生き生きと過ごす様子が描かれていて、福澤さんのポジティブな生き方に深い感銘を受け、勇気づけられました。

その感動をどうしても福澤さんに伝えたくてメッセージをカセットテープに吹き込んで送った

20歳

ヴァン・クライバーン
国際ピアノコンクールで優勝
「6人のファイナリストに残れただけで十分。ここまで来ることができて本当によかった」と思っていたら、優勝という快挙。人前ではめったに泣かなかった親子が、うれし涙を見せた。



© 2009 Altré Media



18歳

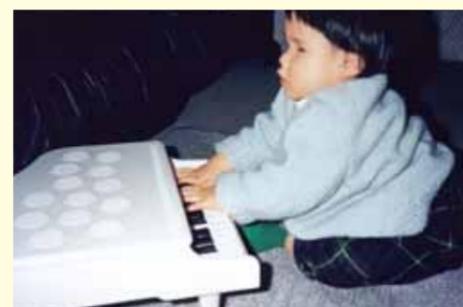
ピアニスト横山幸雄先生の
厳しいレッスン
上野学園大学に進み、世界で活躍するコンサートピアニスト横山先生の指導を受ける。先生の「レッスンには素材ではなく、自分で調理した状態で持ってきた方がいい」の言葉に、プロの厳しさを実感した。

13歳

佐渡裕さんとの
運命的な出会い
指揮者の佐渡裕さんに、伸行さんの演奏テープを聴いてもらったのがきっかけで交流が始まる。フランスで佐渡さんが指揮する、パリ・ラムル管弦楽団の定期演奏会に招待され共演。

10歳

国内のコンテストで
金賞を受賞
青少年対象のコンクールのなかでは屈指のレベルを誇る「ビティナ・ピアノコンペティション全国決勝大会」で金賞を受賞。



2歳

母の歌に合わせて
おもちゃのピアノを演奏
ジングルベルを口ずさむいつ子さんの歌に合わせて、大好きな白いおもちゃのピアノで演奏。言葉よりもピアノでの自己表現のほうが早かった。



0歳

元気に誕生した
喜びもつかの間
生後15日頃。いつまでも目を開けない伸行さんに不安が募る毎日。

「マイナスからのスタートだったけど、
この子がいたから人生が広がった」

がけない反応にびっくりしました。親ばかりですが、この子は、演奏家を聞き分ける耳を持っている！”って(笑)。
通常より遅れ気味の我が子の発達。手探りでもがき続けてきた子育てのなかようやく見えた一筋の希望の光だった。その後、いつ子さんは我が子の音楽に対するわずかな反応も見逃さないようになる。
——ピアノに対しては、伸行さんはどんな反応を示しましたか？
辻井 1歳半のとき、先生が伸行を膝の上のせて、演奏を聴かせるというスタイルでピアノのレッスンを始めました。伸行はレッスン時間になると、自分からピアノの前に這っていき、椅子につかまり立ちして心待ちにしていました。
2歳のクリスマスには、私の口ずさむジングルベルの歌に合わせて、おもちゃのピアノでメモロディーを、しかも伴奏をつけて弾きました。耳で聴いた音楽を鍵盤上で拾って曲として弾けるよ

うになっていたのです。
——それなら将来は音楽の道へ、と考えましたか？
辻井 とんでもない。私は何か一つでも伸行が自信を持てることを見つけてあげただけです。レッスンを始めたのも、ピアノの音色や本物の音楽に触れれば、何か良い効果があるので、との思いからです。でも伸行のピアノへの並々ならぬ情熱や集中力を見るうちに、これが才能ならばもつと伸ばしてあげたいと思いました。
伸行さんが5歳の時、その才能の芽が一気に膨らむような出来事が起きた。旅行先のサイパンのショッピングモールで、ピアノの自動演奏を聴いた伸行さんは、「どうしてもあのピアノが弾きたい」とせがんだ。そこでいつ子さんはスタッフにそのピアノを弾かせてほしいと交渉したのだ。
——普通だったら「あれはダメよ」とあきらめさせるところですが？

辻井 子育てに関しては常に「ダメもと」で色々と挑戦してきました。この時も断られると思いましたが、ダメもとです。そうしたらすんなり「OK」って(笑)。伸行が演奏すると多くの人が集まってきて大歓声を受けました。なかには抱きしめてキスする人もいました。伸行は音楽を通して人とコミュニケーションする喜びを知り、これを機に、人前でピアノを弾くのとても楽しみにするようになったのです。
親が子どもを信じ抜くこと
その後も、いつ子さんは伸行さんの希望をかなえるため、演奏の機会があると知ると、ためらわずにすぐ行動に移した。8歳でモスクワ音楽院の大ホールで演奏したときも、オーディションがあるという小さな新聞記事を見つけて、すぐにモスクワに電話をかけ、実現した。
——そんな行動の原動力はどこからくるのでしょうか？

ところ、お会いできることになったのです。そして、福澤さんから「目が見えないってことに縛られないで、普通に育てればいいのよ」とアドバイスいただき、まさに目からうろこが落ちる思いでした。生まれつき光を感じたことのない伸行にも彼なりの感覚や世界観があり、それを豊かに広げていくことができるはずだと確信しました。障がい児の子育てではなく、この子らしさを伸ばすための子育てをしよう。我が子に眠っている何かを探そう。この出会いでその覚悟ができました。
この子には音楽に対する特別な力がある！
我が子が持つ「何か」、それが音楽なのかもしれない、という子さんが最初に気づいたのは、伸行さんが8カ月の頃だった。
——どんなことがきっかけに？

辻井 ロシアのピアニスト、プーニンが演奏するショパンの『英雄ポロネーズ』のCDをかけたとき、伸行は機嫌よく手足をバタバタさせてリズムをとるんです。ところがCDに傷がついたため、別の演奏家の同じ曲のCDを買って聴かせるとまったく反応しない。もしや””と思って、再度プーニンが演奏するCDを探して聴かせたところ、また、機嫌よくリズムをとったんです。
——伸行さんが音楽に敏感な耳を持っていることに気づいたのですね。
辻井 ええ。なんとかして伸行の笑顔がもう一度見たいという一心でやったことですが、思い





2007年10月に発売した
デビューアルバム「début」
(avex CLASSICS)

辻井 よく分からないのですが、これができるれば伸行はさらにステップアップできるし、喜ぶに違いないという根拠のない自信と、ひらめいたら「即アクション」という持ち前の性格からかもしれません。

モスクワの演奏の大成功で、いつ子さんは伸行さんのピアノの可能性を確信し、音楽の道を意識する。伸行さんは期待に応えるように、国内外のコンクールで次々と受賞するようになった。

——いくら演奏が好きでも、音楽で身を立てていくのは厳しい。まして障がいを持つ伸行さんが音楽家を目指すことに不安はありませんでしたか？

辻井 不安だらけですよ。白杖はくじょうを使って一人で歩行する訓練よりピアノを優先させていました。これでピアノがダメなら、私の教育方針が間違っていることになる”とは思いました。でも、次の瞬間には”こんなにピアノが好きなのだから、大丈夫に

決まっている”って。そうやってただ夢中に突き進んだ結果、ここまで来られたのです。

我が子のピアノ大好きを信じて、やりたいことをやらせる勇氣と決断。「私は息子から人間の可能性の素晴らしさを教えられたのです」。その感慨が国際コンクールでの涙になったに違いない。

伸行さんがヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールで優勝したときの賞状を、いつ子さんは「私の子育ての卒業証書」と思っている。

——いままでの子育てを振り返って、子どもの才能を引き出すために、親にできることは何だと思えますか？

辻井 子どもの可能性を信じること。簡単に言えば子どもを信じることです。親が子どもを信じなかったら、誰が信じてくれるのでしょうか。子どもがやりたいことをやらせてあげること、子どもを信じる勇氣があればこそ。子どもに意欲があるのに、親がどうせダメだからと思ってや

らせないのは、子どもを信じていないからだと思えます。

「親ばか」になって
思いきり愛情を注いで

最近、いつ子さんは自身の子育て体験から、子育てで悩む親に向けて、講演や公式サイトを通してアドバイスをしている。

——そこではどのような質問を受けることが多いですか？

辻井 ウチの子はたくさんお稽古事をしているけど、何が向いているのか分からない”という質問が多いですね。

親は固定観念ではなく、愛情の目で子どもをよく観察すれば、おのずと一番好きなことや興味のあるものが見えてくると思うのです。そうすればお子さんが何に向いているかも、気づくことができるのではないのでしょうか。

さらに、「親ばか」になって思いつき子どもをほめることで、子どもは安心して才能の芽を伸ばすことができると思います。

——子どもの可能性を信じて、

才能を伸ばしてあげるには周囲の協力や環境も大切ですね？

辻井 伸行が小さいとき郊外のマンションに住んでいました。ご近所の方々に仲よくしていただき、居心地が良かったんです。子育てが終わった先輩ママも多くて、伸行をだっこしてくれたり、何かと助けてくれたり。ご近所の方の支えは心強かったですね。もちろん、主人や私の親も非常に力を貸してくれましたが、”遠くの親戚より近くの他人”を実感することもありました。最近はお近所付き合いが希薄になっっている傾向がありますが、子育てには周囲とのつながりが欠かせないと思います。

——最後に、ご自身の生き方のモットーを教えてください。

辻井 私は子育てで辛いとき、とりあえず今日一日を乗り越えようと思つて頑張ってきました。あまり先のことを考えてもどうなるか分からないでしょ。今日一日を精一杯過ごす”ほうが、気持ちラクになります。その一日一日の積み重ねが大切だと思います。



「今日一日、目の前のことを
とにかく一生懸命乗り越えてほしい」